
G i r l s ' T a l kー 八雲と私の同居生活 ー

ユエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Girls' Talk | 八雲と私の同居生活 |

【Nコード】

N9635B

【作者名】

ユエ

【あらすじ】

イマイチ自分に自信が持てない太めな女子大生・高坂綾香。親友で同居人の神山八雲との暮らしの中で描かれる恋と友情……たまに泣いちゃう物語。“一緒にいたい”は、きっと何よりも強い願いになる。

プロローグ（前書き）

男女の間にあるのは『恋』……だけですか？

プロローグ

神山　八雲について訊かれたら、私——高坂　綾香はこう答える。
『最低な人間だ。でも、最高の親友よ』と。

八雲と私は高校が同じで、その頃から八雲は変わってた。でもキヤラと愛嬌のせいか友達が多かったと思う。対する私はどこから見ても普通。切っても切っても同じ顔の金太郎飴みたいな人間で、自分でも面白みに欠けるよな、と思っている。それに鈍くさいし、要領も悪い。

二人は容姿だって全然違う。八雲は背が高く、スラーっとして足も長い。一度、私のジーンズを貸したら、

「これ、七分丈なの？」

と訊かれた。もちろん違ったし、私の手持ちでは一番丈が長かったのに。

面差しは形の整った高い鼻と長い睫毛に縁取られた切れ長な瞳で、まるでお人形さんみたいだし。綺麗な天使の輪ができる瞳と同じ黒髪だし。もうなんていうか、素材が生きてます！　て、こういうことを言うんだと思うな。

私はその正反対で背は低いのにウエストは八雲と大差ない……ごめん、嘘。本当は八雲より大きい。瞳は『つぶら』といえば聞こえはいいけど、ようするに『小さいのね』ってこと。昔のアニソンで『ハナペチャだったってお気に入り』とか『太っちよだった可愛いもん』なんて歌を聴いた時は「嘘つくな！」って叫んだ。だいたい、近頃の服はやけに身体のラインを強調するのが多すぎる。それじゃ、私みたいなぽっちゃり体型——おデブさんはこういう優しい自己表現をする——の人間は最初っから戦力外通知されたも同然じゃないか。仕方ないから、黒やベージュの地味な色合いの服を選ぶ。間違ってもパステルカラーの服なんか買わない。定番の着こなしは、ふわっとした感じでラインが目立たないトップスや丈の長いスカート、も

しくはスカートとパンツの組み合わせが多くなる。楽でいいけど、シルエットが（私の場合は）ずんぐりして見える。気にしてるのに八雲から、

「緊張感のない服ばっかだから、体型にも緊張感がないのよ」

と言われたときは、あいつに殺意すら覚えた。さながら私の場合は、素材が残念ですって感じだろうか。……また自分に優しい自己表現をしてしまった。

こんなに違う私たち。だから、友達になるはずなかった。絶対。なのに、高一の臨海研修でペアを組んだときに「アンタ面白い子ねえ」と妙に気に入られ、今ではルームシェアもしている。大学一年の頃からだから今年で二年目になる。毒舌家で性格もきつい悪友だけど、私が落ち込んだり、自信の持てないときは何も言わなくても察してくれて、

「アンタはそれでいいの」

そう言ってくれるときの八雲の声と表情は吃驚するほど優しい。何だかんだ言っても気の置けない親友なんだ、私たちは。

ただ、二人の友情はちょっと普通とは違うかもしれない。偏見があるわけじゃないけど、一般的には同姓同士で親友になることが多い。けど、私たちの場合は違う。断っておくけど、私が男ってわけじゃないから。男は八雲のほう。そう、神山 八雲は……オネエ言葉の男なんだ。

Talk 1. パンツ騒動(前書き)

八雲のパンツって、何でいつも変なんだろう？

Talk 1. パンツ騒動

「綾香あー、シャンプーが切れてんだけど買い置きは？」

夕食の支度をしている私のもとに、バスルームから八雲の声が聞こえた。いつも買い置きは脱衣所にある洗面台の上って教えてあるのに、八雲はいつまで経っても覚ええない。

「洗面台の上えー」

作業の手を止めずに声だけ返す。火にかけた鍋の中は今夜のメイソン、肉ジャガだ。大ぶりのジャガイモとたっぷりの玉葱が美味しそうに煮立っている。あとは昨夜のキンピラとお味噌汁でOK。お米も八雲がお風呂から上がってくる頃には炊き上がるかな。よし、私って完璧だね。

夕飯作りを最初は当番制でやってたけど、そのうち私が毎日やるようになった。器用で何でも出来る八雲なのに、料理だけはダメなんだ。それを知ったとき、一つでも八雲に勝てることがあったのが何だか誇らしいような気になった。

出来上がった夕飯をリビングのローテーブルに並べていく。テーブルの真ん中に置かれた、二人分には多すぎるような深くて大きなボール状のお皿には沢山の肉ジャガが盛られている。細いくせに八雲は驚くほどよく食べる。燃費がいいとも悪いとも言える身体は羨ましくもある。いくら食べても太らないなんて乙女の敵だ。

私が支度を終えて、テーブルの傍のソファに腰かけていると八雲があがってきた。

「ふー、気持ちよかったわ。あ、綾香あ洗面所の時計、電池切れたわよ」

じゃあ後で換えとか思ってたのに、扉を開けて現れた八雲の姿を見て、その考えも吹っ飛んで思わず叫んでしまう。

「八雲！ パンツだけで出てくるのやめてって言ってるでしょう」
ピンクの派手な色によくわからない珍妙な柄。黄色い矢印が股間

のあたりを指して『Pocket Monster 在中!』と書かれてある。……意味わかんないし。ゲームのポケモンのこと? あんなのどこで買ってくるんだろう。この前も、ヒョウ柄のすっごいキワドい下着かと思ったら、お尻の部分に長い尻尾が付いてた。服着たら邪魔じゃない? って訊いたら、いいの、部屋用だから。と、あっさり言われた。部屋用でも見せられる私の気持ちまで思いやっ
て欲しい。

パンツ姿に照れる私の反応を横目でけらけら笑いながら、八雲はキッチンの方に向かった。変なパンツ姿だけど、うっすら湯気の立つその肢体や上気する頬、無造作な髪とかは女の私が見ても、セクシーですねえ、と言いたくなる風情だ。

「夏場はさ、すぐパジャマ着たら汗かいて生地がベタつくから嫌なの」

キッチンにある冷蔵庫からミネラルウォーターのペットボトルを出すと、そのまま直口で飲みだす。あれもやめて欲しい癖なんだよなあ。

今日こそ断固抗議しようと思って、ソファアの上で姿勢を正した。「いくら汗でベトつくのが嫌だからって女の子と一緒に暮らしてるのに、そんなブリーフ一枚で出てくるのはどうかと思う」

至極、真面目な調子で言ったのに揚げ足をとるように、

「ブリーフじゃなくてトランクスよん、コレ」

裾をチラっと上げ、笑ってリアクションしてくる。

「パンツはパンツでしょ!」

私の傍まで来た八雲をクッションで叩いてやろうとしたら、軽々と避けられてしまった。おとなしく叩かれときなさいよ。

「おお、怖い。何、綾香ってあの日?」

まだ少し水の残るペットボトルで火照る頬を冷ますようにしながら、八雲が切れ長の目を細めて訊いてくる。

「……何よ、あの日って」

何か嫌な予感がするけど、二人しかいないんだから分からなきゃ

自分で尋ねるしかない。

「長谷川理恵とサトエリがCMしてるの」

何？ 理解しようとして質問したのに、ますます分かんなくなる。サトエリってヨガか何かで見たような気がするけど。ヨガと私って何の接点もないし……第一、長谷川理恵に到っては、誰それ？ な感じた。

「……………」

私が一人、思考の迷宮で考えていると、八雲がじれたような声をだす。

「もう、生理よ！ せ・い・り！」

八雲が薄い唇を大袈裟に開きながら『せいり』の三文字を言ってみせる。

「せ……」

私は、言われた言葉のあまりのインパクトに顔が熱くなるのを感じた。

「ば、ばかぁー！」

掴んでたクッションを思いっきり八雲に投げつける。弧を描いて飛んだクッションが、今度は顔面に綺麗に命中した。

「痛っ！ なにすんのよ、わかんない綾香が鈍なのよ」

八雲は三人もお姉さんがいて、その末っ子として生まれたからか、この辺りがオープンなところがある。私はごく普通の両親の下に生まれて一人っ子だけど、八雲が普通とはちよつと違うことはわかる。いくらオネエ言葉で話すっていったって、男の八雲に女の子の日のことまで触れてもらいたくない。ていうか、普通じゃないと思う。いくら友達で親友でもだ！

私はそっぽを向いて意地悪を言った。

「ふーんだ。八雲みたいな変態さんには夕飯食べさせてやんない」
少しは反省すればいいんだ。

「あーら、綾香みたいな意地悪さんには小田くんの秘密教えてやんなーい」

相手も負けじと仕掛けてくる。

——っぐ、その手は卑怯でしょ。

ああ、小田くんっていうのは……その、なんというか、えー……簡単に言うと、アレだ！　って、アレじゃわかんないか。ううう、そのお、私の『好きな人』なんだ。もちろん、片思い。もうこれ以上ないってくらいの。

大学入ってからずっとだから、片思いも同居と同じ二年目だ。小田くんは短い茶髪にキリリと涼やかな目元、薄い唇は冷たい感じにも見えるけど、そこがまたクールで私は好き。それに爽やかなスポーツマンで、構内でテニスしてる姿を初めて見たとき王子様かと思った。八雲にそう言ったら「漫画の読みすぎ。いまだき、漫画でもお寒くてナシなベタさね」と言われたけど。なんて言われようと、私はその瞬間から恋に落ちたの。

でも、それからが大変！　基本的な個人情報——血液型や生年月日とかね——に始まり、好みのタイプや趣味とか身につけてるブランドのチェック。とにかく小田くん、小田くん、小田くんな一年間を過ごした。そうこうしてるうちに、どんな手を使ったんだか、いつの間にか八雲の奴が小田くんと知り合いになって、こうしてレアな小田くん情報を時々だけ教えてくれるようになった。八雲に頼んで紹介してもらおうかとも思ったけど、見てるだけでドキドキして仕方ないのに、本人を前になんかしたら……ああダメ！　絶対変な顔とかしちゃう。無理だよ。

勝ち誇ったような顔でソファアの私を見下ろす八雲に上目遣いで降参した。

「……食べていいから、教えて」

背に腹はかえられないもんね。私が顔の前で手を合わせ更にお願いのポーズを見せると、八雲は口元を骨ばった大きな手で覆いながら、瞳だけで私を見て、

「本当ね？」

確認するように訊いてくる。その問いに勢いこんで、八雲の手に

ぶら下がるようにしがみついた。懐かしの抱っこちゃん人形みたい。
「本当だよ」

指の隙間から覗く八雲の顔に赤みがさしている。いくら夏間近つていってもそんなに暑いかな。

「絶対？」

再度訊いてくる八雲に、頬を膨らませながら言い返す。

「もう、しつこいよ！ 食べていいったら！」

女に二言はない、とばかりに腰に手をやり胸を反らす。すると八雲が耳打ちで『秘密』を教えてくれた。

「実はね……」

ゴニョゴニョと囁かれ、何だか耳元がちよっとくすぐったい。

「う、嘘だぁ！」

「本当よ」

「え、じゃあ……八雲と同じってこと？」

『八雲と同じ』に力がこもったけど、悪意があるわけじゃない。他意はあっても。

「何よ。引っかかる言い方してくれるじゃない。でも、まあ同じっちゃ同じね」

「だ、だって、小田くんは八雲とは全然違うよ？」

「そりゃ、いくら一緒だからって同じ人間になるわけないでしょ」

「そっか。じゃあ、八雲だけが変わなんだね……やっぱり」

「やっぱり、て何よ。アンタも中々言うじゃない」

二人で住んでるんだから誰も聞いてるわけないのに、内緒話するみたいに顔を寄せ合って話した。相手が「秘密の話」というときは、いつもこうする。そんな時に作られる二人だけの空間は穏やかで安心していられる。そこは完全な世界で、過不足なく全てが満ち足りてるような気がした。確かめたことはないけど、八雲もそう思ってくれてるはず。

私たちの空間の外で、炊飯器が炊き上がりの音を響かせた。

「あら、出来たみたいね。さっさと夕食飯を食べましょう。もうア

タシ腹ペコなの。

綾香、大盛りでお願い」

過不足ばかりの満たされない現実に戻って、八雲がさっそく喚いた。

立ってるんだから自分がついて来ればいいのに。まあ、いいや。秘密も教えてもらったことだし、大目に見てやるか。小田君情報を心の秘密手帳にしっかりと書き込んでから、キッチンに向かった。言われたとおりに八雲用の井茶碗に盛っていく。一杯で三合炊いたご飯が半分以上も消えた。

一体あの細い身体の何処に入るんだろう、と不思議に思いながらテーブルの前に座ってテレビのお笑い番組を観てる彼に目を向ける。ふと、さっきも気になった『Pocket Monster在中!』のパンツ書きが目についた。

なんだろう、アレ。気になる。パンツに書かれた文字の意味を訊くのって変かな？ いや、相手は八雲だし。待って待って、仮にも私は女なんだから、これって逆セクハラにならない？ でもさ、八雲だってさっきセクハラまがいのこと言ったじゃん。そうだよ、だからいいんだよ。いいことにした、私が。このまんまじゃ、すすきりしないし。よし、訊いちゃえ！

「ねえ、そのパンツに書かれてる文字って何て意味なの？」

私は内心はむちゃくちゃ悩んだくせに、わざと何でもないことのように質問してみた。だって、パンツで悩んでたなんて思われるのは癪じゃない。

「え……あー、アンタは知らなくていいのよ」

そう言いながら、片手をヒラヒラとあしらうように振った。むう、あの仕草は私を子供扱いするときのポーズだ。同年だけど、私のほうが誕生日早いからお姉さんなのに。

「教えて」

不満たっぷり足音を荒げて八雲に歩み寄る。知的好奇心……なんて言ったらオーバーだけど、やっぱり気になったことは、はつき

りさせときたい。

「うーん……ほら！ ゲームのポケモンのことよ」

嘘だね。今、鼻がピクピク動いた。八雲の嘘はこれで分かる。だいたい、股間のあたりを指して『ポケモン在中！』なんて無理があるじゃない。絶対、違う意味があるんだ。

私は八雲に井を突き出しながら、にじり寄った。

「本当のこと教えて」

じとり、と瞳を見据えてやる。私は『つぶら』な瞳だけど眼力がある。だって八雲は私がこうすると大抵はお願いを聞いてくれる。そういうのを眼力って言うんだ、って雑誌には書いてあった。

「やあーね、本当よ。私がアンタに嘘つくと思う？」

「思う」

あくまで教えないつもりで、八雲はテーブルに並べた肉ジャガから大ぶりのジャガイモを選んで口に運んだ。さり気なく視線もずらされた。

「いいもん。明日、学校で友達に訊くから」

ふーん、とそっぽを向いた。

「だ、ダメ！ ごほ……えっ、ごふ」

何故か八雲が急に慌てて、ジャガイモで咽てしまう。口に手を当てて物凄く咳き込んでるから、思わず介護するみたいに優しく背中を擦ってやった。「もうお爺ちゃんたら」なんて言いながら。

「あ、綾香あ、絶対そんなこと他人に質問しちゃダメよ。特に野郎には、絶対つつ対ダメなんだからね！」

よっぽど苦しかったのか、目の縁に涙をうつすらと浮かべている。

「じゃあ、教えて。そしたら他の人に訊かないで済むでしょう？」

今こそ使え、眼力！ とばかりに、八雲の瞳を覗きこんだ。瞳の中に、私が映りこんでる気がした。

八雲は困った顔をしながらも、ついに降参とばかりに両手を挙げた。

「わかった。あー……その、ここに、ね」

どうも歯切れが悪い。なんだろう、そんなに言いにくいこと？
私は訝しげに、しどろもどろ説明する八雲を凝視した。きちんと正座までして。

「その、ねPocketなあ……Monster在中。みたいな」
そのまんまじゃん！

「もう、はっきり言ってよ。言い澁むなんて八雲らしくないよ」

「アンタ英文科でしょ？ スラングくらいニュアンスで理解しなさいよ！」

「それなら八雲もわかり易く説明しなさいよ、英・文・科でしょ！」
噛み付くみたいに言い返した。ついでに持ったままだった丼も、
どんとテーブルに置いてやった。悪かったわね、スラングも分からない英文科で。

緊迫した二人の空気とは裏腹に、八雲の後ろのテレビからは虚しい笑い声が漏れてくる。時折「欧米か！」とツツコミも聞こえてた。
本当だよ、ここは日本なんだから英語のスラング書いたパンツ穿いてるほうが悪いんだよ。八雲は欧米か！

「言いにくいことだって、世の中にはままあるのよ」

「言い訳はいいから早く、八雲先生」

八雲を急かすように床を叩く。

「だからあ、Pocketがその、ポケット辞書とかあるでしょ？
だから、コンパクトとか小さいみたいなニュアンスよ。で、Monsterが……男の股間にあるものって言えばわかるでしょ？」

「え、小さい男の人の……」

私はそこまで考えて何となくだけ意味を察してしまった。かっかと顔が猛スピードで熱を帯びていく。

「や、八雲の、エッチイイー……！」

上擦る声で叫びながら、渾身の力を込めて思いっきりビンタをしてやった。しかも両手で。小気味いい快音が、バチーンとリビング中に響いた。あはははは、とテレビの爆笑がイイ感じに重なった。

Talk 1. パンツ騒動（後書き）

こんにちは、ユエです。

早速、続きを投稿してみます。

変なパンツや派手なのを愛好する人がいます。反対に、断固として地味な人も。

なんていうか、人って色々だな、と思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9635b/>

G i r l s ' T a l k — 八雲と私の同居生活 —

2010年10月10日06時49分発行